



## Digital Book

### 70's PROJECT

#### 「まちの人間国宝さん探しプロジェクト」目的

人とのふれあいが希薄になり、なんとなく水くさい世の中において、世代の断絶、過疎化、高齢化、地元との関わり、高齢者の生活ぶり、地方の元気なさ、など「ほっとけない」という課題が満載です。そこで、地域や世代を超えた「ひと」にスポットを当て、“まちの人間国宝さん”探しをすることによって、メンバーが「うらやましい生きかた」を学びながら、地域住民を巻き込み、地域活性につなげることを目的とします。

#### 事務局

〒621-0805 京都府亀岡市安町中畠138番地  TEL\* 090-3848-8676 (松尾)

 E-mail\* [kmp@kame-genki.org](mailto:kmp@kame-genki.org)  URL\* <http://kame-genki.org/>





# 70's PROJECT

## ■概要

私たちは、2014年度京都府府民力推進課、同志社大学大学院新川ゼミ等の協働演習で誕生したプロジェクトチームです。人のふれあいが希薄になり何となく水くさい世の中において、地域や世代を超えた「ひと」にスポットを当て、地域の活性化に一石を投じることを目的としています。

## ■プロジェクト内容

まちの人間国宝さんプロジェクトは、

「同志社大学大学院総合政策科学研究科 ソーシャルイノベーション研究プロジェクト」

平成26年度後期・NPOと行政等の協働実践演習を契機に組織され、

世代を超えた「ひと」にスポットを当てることによって

地域の課題解決に向けて一石を投ずることを目的としています。

まちで頑張っている、“まちの人間国宝さん”を探し出し、その対談イベント等の開催による地域活性化のための取組み。京都府全域で認定しネットワーク化を目指します。

## ■身近な人間国宝さんを発掘して、自分自身の生き方を発掘しよう！

あこがれる人うらやましいと思う人に出会えてますか！

身近にも、きっといるはずです。一緒に探してみませんか？

その人たちを自分と重ね合わせて、今後の生き方や、セカンドライフ等に、どんな道をたどればいいのか、大いに、参考となる事でしょう！地域での人との交流、若い人から年配の人までの多世代交流を、さあ！一緒に、創めましょう！

## ■認定基準

- ①(基本)メンバーが、羨ましいと思う生き方をしている人
- ②人に感動・共感を与えるような活動をやっている人
  - (例) 地域(住民)を巻き込む活動を長年やっている人
  - (例) 普通の人では、出来ないような活動をやっている人
- ③原則として、京都府内で活動している人
- ④老若男女を一切問いません。
- ⑤主体的にインタビューに応じ、その内容の公開を拒まない人

認定書(見本)



次ページ：認定者一覧(認定順)➡





認定日：2015.09.27 認定者：谷口

## 「桃山東熟年懇話会」代表 清水 直一 氏



### 「89歳のチャームングなリーダー」

#### ■概要<はじめに・・プロローグ>

清水直一さんという方に最初にお会いしたのは、2016年の4月22日の「ふれあいオレンジカフェ桃山東（以下オレンジカフェ）」においてだった。実家の父が何か月前から、地域で行われているこの「オレンジカフェ」という集まりに参加しており、実家にそのチラシが置いてあったのだ。見ると、その日の「オレンジカフェ」の内容がびっしりと書いてあった。その多彩なプログラムにまず驚いた。父によると、この集まりを立ち上げ、運営している責任者が清水さんという人で、89歳だという。俄然、私は、この清水さんという方に興味を持った。どのような方が「オレンジカフェ」に集まっているのか、そして、その集まりの主宰者の清水さんは、どのような方なのか？私は、4月22日、「オレンジカフェ」に参加して、その活動を目の当たりにした。その日、清水さんとあまり長くはお話できなかったものの、まずは初めて顔を合わすことができた。その後、清水さんに「オレンジカフェ」の勉強会（近況座談会）に誘われ、参加することになり、だんだんメンバーの方々の顔を覚え、清水さんとも少しずつ話をするようになった。その勉強会の席で、清水さんが何年も前から企画として温めていた「郷土史跡探訪ウォーキング」の実施が案内され、伏見の歴史に興味のある私は当日ウォーキングのお手伝いとして参加した。そして、この時に以前から、まち歩きの企画「だいがトレジャーハンター」で一緒に活動を行なった醍醐いきいき市民活動センターにもお声かけして、お手伝いスタッフとしての参加をお願いした。なお、清水直一さんへの聞き取りは、私が清水さんと1対1で行うという形ではなく、オレンジカフェ、醍醐いきいき市民活動センターそして、70's Projectの各々のメンバーが総勢10名が集まり、まずは懇談という形から始まった。

#### ■現在<オレンジカフェって何？>

清水直一さんは、89歳、現在、京都・伏見の桃山東でお住まいである。現在、地元において、月2回、毎月第2・4水曜日にオレンジカフェを開催している。オレンジカフェとは、認知症の方の自立支援を行う集まりのことで、認知症予防のための活動に力を入れている。京都において、最初に、オレンジカフェが出来たのは、3年前「オレンジカフェ今出川」だ。京大病院の武地一先生の指導のもと、ここでは、かなり重度の認知症の方の自立支援を行っているとのことだ。清水さんは、そこでの活動をもとにして、昨年10月に、仲間とともに地元でオレンジカフェをオープンさせた。月2回、10時半から15時半の5時間、桃山東文化ホール西隣の「桃山町西町集会所」（参加費無料、申込不要）で開催している。プログラムは、3部構成となっており、1部（10時半から12時）は「おしゃべり喫茶」が行われる。2部（13時半から14時半）は「お楽しみ番組」・・テーブル毎に、お絵かき、折り紙、ケン玉、トランプ・かるた・百人一首、マジッククイズ、ストレッチ・ロコモなどが行われる。3部（14時半から15時半）は、「特別番組」・・体験発表、出前講座、ドキュメンタリー上映会などが行われる。本当に多種多様な内容だ。毎回平均して、20名の一般参加があり、サポートスタッフは、約17名で運営している。







認定日：2017.01.31 認定者：谷口、堀家

伏見城研究会

# 若林 正博 氏



「そうだ、伏見のことは若林さんに聞こう！」

## ■推薦理由

京都市伏見区でずっと育ってきた、若林正博さん。

生まれは昭和 43 年 11 月。地元伏見のことなら、美味しいパン屋さんから伏見城のことまで、あらゆることを知り尽くす、地域愛に溢れた歩く「伏見の辞典」みたいな方です。あと、草野球も大好きで「伏見ドリフターズ」というご自身で立ち上げた軟式野球のチームに所属されています。

若林さんの第一印象は、控えめで素朴で熱い。穏やかな雰囲気裏側に見え隠れする、未知数の底知れない何かスゴい大きなものを感じます。非常に謎のベールに包まれてもいます。一体普段どのように暮らしているのか？好きな食べものは？ご家族は？お仕事は？趣味は？ etc…… さあ、若林さんを質問攻めにして、ベールをはがしていきましょう！お聞きすると若林さんの平日の朝は早いのですね。

6 時 30 分に自宅の玄関を出るまでに、地元のお気に入りのパン屋さんのちょっと分厚めのトーストで朝食を済まし、朝の洗濯をパワフルに行き、京阪と市バスを乗り継ぎ職場に向かわれます。職場は左京区の某施設。

そこで若林さんは、京都のあらゆる古い郷土資料をニーズに応じて、市民、大学教授、専門家、メディアなどに提供するお仕事をされています。いかに大事かを後世に伝えていかねばならない、先人の生きた証が残る貴重な資料を、館内の所蔵や全国各地から見つけ出してくる、とても素敵なお仕事です。お仕事が終われば、ご家族のもとに真っすぐ帰られるそう。ご家庭での若林さんは、大学生と中学生の 3 人のお子さんがいる、お父さんの顔も。同い年の奥さんに、ご自身も好きなスイーツをお土産に買って帰る、優しい旦那さんの顔もお持ちです。

でも、もしかすると若林さんの顔が一番輝くのは、それは「伏見城研究会」で活動しているときかもしれません！！

「伏見城研究会」とは、豊臣秀吉が晩年を過ごし、後に徳川家康が入った名城として知られる伏見城とその城下について調査、研究している伏見区の御香宮神社の三木善則宮司と考古学研究者らが昭和 49 年に立ちあげた歴史ある研究会です。「伏見城」と付いているので、お城萌えなマニアの方の集まりかと想像していたのですが、そうではありません。確かに若林さんのお話は、マニアの方も唸るような、私など付いていけないほどですが、研究会のみなさんは真面目な歴史研究家の方々です。研究会の例会では毎回お題を決めて「琵琶湖疎水と伏見」「伏見発祥の寒天について」などさまざまなテーマに沿ってメンバーの方が互いに発表し、知見を広げていらっやいます。若林さんは、伏見にある地名「桃山」はいつの時代から使われ始め定着したのか、その由来を明らかにされ、成果を伏見城研究会で最近発表されました。地元伏見のひとでも知らないかもしれない、地名の由来まで調べ上げて発表する若林さん。「知りたい」という地域愛の原動力となるものは何なのでしょう。最後にその原動力の秘密をお聞きしました。若林さん「先人から受け継がれた、「まち」「営み」「息づかい」「在り様」を次の世代、またその次へと先人の生きた証をバトンにして、地域に腰を据えて根差し、多様性のある伏見の魅力をまちあるきや文献調査などを通して発見し続け、その素敵さを、伏見に住んでいるひとや来るひとに分かりやすく伝えていきたい。伏見のスケールは大きく、自分の関わっていることの端が見えず果てもないが、それでもやるのがどんどん広がっていくのは楽しい。過去、現在、未来の伏見を愛する若林さんだからこそ、果てのない「知りたい」が原動力になるのですね。（文責：堀家 沙里）





認定日：2017.03.10 認定者：松尾



「みんなの居場所 わっかっか！」代表

# 水谷 千里 氏

「“住み開きサロン” を軽やかに展開中！」

### ■紹介記事

9 か月ほど前のことだったでしょうか、突然水谷さんから電話をいただき、妙に親し気だったことを昨日のことのように覚えています。

勿論知らない方ですが、一度お会いしましょうということになり、その日のうちに私のところまで飛んで来られました。この「行動力」は何なの、と正直思いました（笑）。

同じ「住み開きサロン」を運営する者同士、意気投合。数時間話し込んだのは言うまでもありません。彼女は大阪府吹田市の生まれ、あの万博で有名な千里ニュータウンにちなんで名付けられたとか。短大を卒業後、京都の宇多野ユースホステルに勤務。そこで、人とのつながりがいかに大切かをあらためて体感。彼女の、生き方の「背骨」になったのでしょう。その後、縁あって南丹市に移住。胡麻で10年、殿田（世木）に引っ越して3年になるそうです。自然豊かな素晴らしいまちで、みんなでワイワイいいながら暮らしたいという思いで、「みんなの居場所 わっかっか！」を立ち上げ。子どもに安全なものを食べさせたいと始めた、パン工房 農～みのり～の経営、京都府『里の公共員』、という三足のわらじを、楽しんでらっしゃるように見えます。結局、好奇心のかたまり、楽道家だと思いきや、本人曰く、結構寂しがり屋の怖がりらしい。「わっかっか！」は、メンバーの意見や思いつきでいろいろな企画を「軽やかに」実践するも、商売のほうは我流ながら結構手堅いところがおもしろい。

彼女に「次の一手（目標）」を訊いてみたところ、この地域に都会の子ども達を招く、教育体験旅行（農村民泊）の受け入れを広げることと、若者と共に考える、僕らが作る未来創造計画（世木地域 MIRAI プロジェクト）を軌道に乗せることらしい。次から次へとアイデアが飛び出す原動力はいったい何か！？

結局「自分のためにやっていますから」とさりりと言っける、執着のなさ、癒し系の笑顔が彼女の最大の武器（魅力）ですね。

（松尾 清嗣）





認定日：2017.04.13 認定者：松尾

「健康演歌の会」主宰  
西脇 安信 氏



「亀岡の“ご意見番”健在!!」

■紹介記事

昭和6年（1931年）亀岡市（内丸町）生まれ。

小学生のころから、家業の建具屋の仕事を見ていたが、ある日京都木屋町の辻で手相をみてもらうと、「あんたは家におったらあかん。外に出たら出世する！」の一言で、就職を決意。

ところが、その直後に、父親が亡くなり、家業を継ぐべきか大いに悩むことに。一晩考え、就職先の社長には、丸坊主になって覚悟のほどを示し、やむなく退職。その後紆余曲折があったが、70歳で引退。若い頃から俳句、囲碁から野球、ボウリング…と、とにかく多趣味。話題に事欠かない、楽しい人です。そんな西脇さんに、私をはじめとお出会いは、たしか10年ほど前。当時“ブータロー”の私が、亀岡市の運営する、チャレンジショップの店長をやっていたときの、最初のお客さん。

毎日コーヒーを飲みに来ては、いろいろな話をしてくれました。

そのとき、口にすることは必ず実行するという彼の、強い信念を持った生き方を大いに学びました。その原動力はいったい何なのか。単なる好奇心のかたまり？、そのチャレンジ精神はハンパではありません。興味を持ったことを次から次へと実行に移す姿勢は、当時の私に欠けていたこと。

父親を早くに亡くした私にとっては、まさに人生の師、父親代わりのような存在と、勝手に思っています（笑）。

その後も、私の主宰するプロジェクトでも、いろいろとアイデアをくださり支えていただいております。彼の魅力は何といても、常に“ファイティングポーズ”を崩さない、「負けず嫌い」なところ。今の趣味はカラオケ。毎晩11時から12時まで、15曲練習することをノルマにしているとか。

うまいへたではなく、あくまでも「健康カラオケ」を旨としているとのことですが、

主宰する「健康演歌の会」で仲間の、M氏を負かすことが当面の目標らしい（笑）。

ただ、家族に言われて、年内には運転免許証の返納も考え中らしい。行動範囲が極端に狭まるのでは、と個人的に少々心配しておりますが、義理人情に篤い、亀岡の「ご意見番」は健在です！

（松尾清嗣）





認定日：2017.05.12 認定者：松尾

「NPO 法人  
史料データ保存ネットワーク」理事長

向坂 正美 氏



「このままでは古文書がなくなる！を何とかした男」

#### ■紹介記事

昭和 23 年（1948 年）京都市生まれ（現在、右京区在住）。

私が向坂さんにお出会ったのは、確か 3 年ほど前。某一般財団法人主催の、セカンドライフ対談イベントでの、対談のお相手。私が会場のエレベーター前で不安そうにしていたところを、優しくお声掛けくださったのが、向坂さん。第一印象が「なんと、ダンディー！」。訊けば、あの「姉川の合戦」で、徳川家の家臣として戦功を上げた、向坂3兄弟の嫡流で 36 代目だとか。上品で、物腰柔らかく誰にでも優しいジェントルマンに、城主でもあった戦国武将の血が流れていると思うと、ちょっと不思議な気もします。

また、向坂さんは、小学生の頃からラジオやアマチュア無線にハマり、京都・寺町の電器街通いが大好きだったとか。どちらかといえば、“理系”で、国語や社会、特に歴史が嫌いなお方が、2008 年市井の古文書等の調査・保存をミッションとする任意団体「史料データ保存ネットワーク」（2010 年 2 月 NPO 法人化）を立ち上げられたのも、何とも不思議。この活動を始めるキッカケは、

滋賀県・長浜の「姉川の合戦図屏風」（福井県立博物館所蔵）に描かれた先祖について、父親がずっと調べていたが、60 歳過ぎで亡くなったので、そのあとを引き継ぎ調べてみよう。

そのためもあって、長年勤めた三洋電機を 58 歳（2007 年）で退職を決意。

その後即、行動に移されたところが凄い！色々な分野の会合に出向き、2 年間でなんと 2000 人の人脈づくり！私が個人的に理想とする、アクティブシニアの秘密は、どうやらこちらあたりに。

「このままでは古文書がなくなる！何とかしなければ。単に古文書を楽しむのではなく、保存する NPO がない！」との危機感を新聞やマスコミが取り上げ、“同志”が集まったとのこと。

今では地元右京区にとどまらず伏見区でも活動の場を広げ、「まちおこし」としてもその存在感は増すばかりです。他にも多くの団体に所属し、今や押しも押されもしない、「公共人材」です。

さて、次の目標は？と尋ねると、ズバリ「古文書保存条例」づくり、だとか。

2019 年秋には京都で国際博物館会議があり、また、文化庁の京都移転など、地方創生の気運を一層高めたいそうです。やっぱり、目線が高いですね！（笑）

（松尾 清嗣）





認定日：2017.05.15 認定者：谷口、堀家

「トランスカルチャー・シェアスペースDeまち」代表

西馬 晋也 氏



「“学生×地域×アート” Deまちおこし！」

#### ■紹介記事

京阪出町柳駅より徒歩10分ほど。出町櫛形商店街の一角にあるトランスカルチャー・シェアスペース「Deまち」。2012年のオープン以来、まちづくりやジビエ、旅、お金、野草など、さまざまなテーマを講師と参加者が一緒に学ぶスタイルのワークショップを毎月開催しています。今回70's PROJECTの人間国宝さんの認定記念として、インタビューをさせていただいた西馬晋也さんは、この「Deまち」を運営する株式会社応用芸術研究所（代表：片木孝治）という、地域と大学生が連携してまちづくりを行う会社の役員であり、また、福井県鯖江市の地域おこし協力隊員でもあります。さまざまな場所を横断し、ひととひとが出会う場をつくっていく西馬さん。どのようにひとやまちと関わろうとしているのでしょうか。個人的には学生時代から知っている西馬さんですが、今回改めて深くお話を聞くことができました！現在西馬さんはだいたい月の半分ずつ、福井県鯖江市と京都府京都市それぞれを行き来して暮らす、2拠点居住をしています。鯖江市では2004年より、京都精華大学で建築を教えていた片木先生が立ち上げた「河和田アートキャンプ」という、学生×地域×アートがテーマのプロジェクトが継続しており、西馬さんは学生時代からこの取り組みに関わって、現在も地域と学生との橋渡し役を担われています。2012年からは、鯖江市での取り組みの成果をさらに他の地域でも活かそうということで、京都府与謝郡与謝野町・京都府南丹市美山町・福井県坂井市丸岡町でのプロジェクトも順に立ち上がり、それぞれがテーマを持って、学生が主体となり運営されています。西馬さんは、地域の方や学生たちと伴走して、互いの調整役になり、地域で世代交代が上手くいっていない場合でも、アートキャンプに関わる次の代まで引き継ぎできるよう、地域を見渡してひととひとをつないでいくそうです。自ら運転をして毎週あちこちの地域を移動し、たくさんのひとと関わり、休む間もなさそうな西馬さん。横からチラッと見たグーグルのスケジュールはびっしりと色わけされ、予定がつまっています。そんなにも忙しいと、自分を見失うことはないのだろうか。インタビューが終わって、じゃあまた！と小さく手を振る西馬さんの様子が大学時代の西馬さんと一瞬ダブって、懐かしくなりました。でも、昔とは全く違う。忙しいし悩むけれど、未来を見据えて前に進み続ける力強い西馬さんの姿が見えました。

（堀家 沙里）





認定日：2017.09.08 認定者：谷口、松尾

「チーム・シラベル」

# 是住 久美子 氏



## 「“図書館革命” 進行中！」

### ■紹介記事

是住さんは今、八面六臂の活躍をしているいわゆる“時のひと”です。

京都府立図書館情報サービス課の課長として司書の仕事を行いながら、市民グループ「チーム・シラベル」のメンバーとして、図書館のサービスを市民活動に活かす取り組みを精力的に行っています。

「チーム・シラベル」誕生のいきさつです。

まず、2年前の春（2015年4月）に同志社大学大学院総合政策科学研究科（新川達郎教授）で開講された京都府そしてNPOの協働実践演習で、是住さんが「カラーニング」チームを立ちあげたことから活動が始まりました。「カラーニング」とは、共に学ぶということ・・・図書館を単に図書の貸し借りの場とするのではなく、図書を介して、利用者である市民が図書館とともに学び合う場としようとするものです。

是住さんは、この「カラーニング」の考え方をプロジェクトとして、京都府に対して「府内ベンチャー」として提案を行いました。

そして、その府内ベンチャー提案によって、京都府の府民力推進課NPOパートナーシップセンターの協働コーディネーターとのつながりが生まれ、それをきっかけに京都府庁内に

「きょうとフューチャーナレッジセンター～地域力向上図書館連携プロジェクト～」(通称：シラベル)というプラットフォームが、2016年に誕生しました。

そして、京都府庁や京都府立図書館そして亀岡市立図書館（中央館）で、図書館の蔵書や資料を、どのように実際の市民活動に活かしていくのかという講座を行い、活動しています。

図書館の従来のサービスや機能はこのままでいいのかと思いつけたこと、そして、

その想いをいろいろな場所で語り、訴えていったことが多くの人々の共感を集めていきました。

是住さんのエネルギーな「行動力」、とことんやり続ける「粘り」、そして未知の領域に足を踏み入れる「チャレンジ精神」は、タダモノの域を超えて、すでに“スーパー！”の領域に入っています。

“新しい時代のあるべき図書館の姿”を一途に追い求める是住さんの姿は、そのざっくばらんでキュートな人柄ともあいまって、多くの人に影響を与え、周囲にいる人たちの行動さえも変えてしまう不思議な魅力（マドンナの魅力！？ともいうのでしょうか・・・）に溢れています。

お話を伺っていると、逆風の時や不遇の時代もあったという是住さん。でもそれだからこそ、逆に実直の姿勢を貫くことができたのではないかと思います。

最後に「疾風に勁草を知る」という言葉を思い出しました。しかし、当の本人の是住さんは、

やりたい環境でやりたいことをやっていた（いる）だけ・・・かもしれません。「肩ひじ張らずに軽やかに！」

ここに、是住さんの人生の極意がある！と思いました。

（谷口英明）





認定日：2017.12.19 認定者：松尾

「ほづあい研究所」 所長

吉川 慶一 氏



「幻のジャパンプルー “京の水藍” を復活させた男」

#### ■紹介記事

吉川さんのご縁は、私が 2010 年亀岡で初めて毎月開催の手づくり市を始めるに当たり、地元の目玉作家さんとして白羽の矢を立てたこと。地域の活性化に向けた取組みに共感いただき人肌脱いでくださったことがそもそもです。

実直なお人柄と、誰にも負けない「藍」に対する熱い思いが、何ととっても彼の魅力。藍染めの商品といえば、サッカーのワールドカップで日本選手の活躍もあって、「ジャパンプルー」として T シャツが世界的に大ブレイク。

藍の注目が増す中、60 歳を契機に、幻の藍・京の水藍を復活させたい、藍を亀岡で育て次世代に引き継ぎたいという思いで、2015 年 1 月「ほづあい研究所」を設立。

聞くと京都駅の南側は 100 年ほど前まで一面藍畑だったとのこと。その後国策で栽培されなくなったという。

幻の藍の種を探し求めて先進地を調べていたところ、たまたま徳島の藍師（注）、

佐藤昭仁さんが京の水藍を育てておられるという情報を得、早速会いに出かけるも、

少々到着が遅れたこともあり、いきなり「京都人は嫌いや！」と一喝。一時間の説教が始まったという。

万事休すかと諦めていたところに、藍研究の大家、京都芸大の内藤名誉教授が共通の知り合いだったことが幸いし、すったもんだの挙句、後日承諾の電話があったことから、すべてが始まりました。

種を分けてもらったご恩に報いるべく毎年状況報告を兼ねて徳島まで挨拶に。

今では亀岡市保津町で栽培した「京保藍」ブランドの商品が、パリのメゾンキツネ（藤井大丸にショップ）にて展開、2018 年春には「ほづあい研究所」として初めてファッションショーをギャラリーかめおかにて開催。加工品の藍茶も本格的に販売予定らしい。

今後の目標、「ほづあい研究所」の法人化に向けて、スタッフと共に頑張りたいとの決意がありあり。

最後にモットーは、と訊くと、すかさず「藍が育つ保津町 藍があふれる亀岡 藍で愛を育むまちに！」。

藍染めが触媒となって、いよいよ元気なまちづくりがバージョンアップします！

（注）「藍師」とは葉藍から染料の染（すくも）と呼ばれる藍玉をつくる製造業者のこと。

（松尾 清嗣）





認定日：2018.01.29 認定者：松尾

「豊屋辰蔵杉本豊店代表 四代目辰蔵」

# 杉本 悠一 氏



「宮津のブランディングはオレに任せろ！」

## ■紹介記事

京都府の北部、あの天橋立で有名な宮津市で、とっても爽やかな方とお会いしました。地元で生まれ育った彼は、90年を超える家業の豊屋を継ぐべく、20代で家に戻る（四代目を継いだのは昨年）や否や、仕入れ、商品のラインナップ、作り方まで、お客様目線に立った「改革」を次々と断行。これまで培われてきた豊屋辰蔵の伝統の上にさらなる進化を心がけているとのこと。その頃に、戦国もののゲーム「信長の野望」にハマリ、高校時代苦手だった日本史に興味を持ち出したという。家業の仕入れ先がある、熊本や大分・国東半島が、ご当地大名・細川忠興公ととても深い関わりがあることを知ると同時に、文武に秀でた数寄人（すきびと）忠興をまちの歴史的財産として活かしきれていないことに歯がゆく思い、宮津のブランディングは「オレがやらねば、誰がやる！」と覚悟を決めると、地元の才能ある若者や行政とのネットワークづくりに邁進。（地域の様々な取り組みに参加する内に自然とネットワークができ、また趣味である音楽活動をする内に地域の素晴らしい才能に出会った、と謙遜。）地元の子どもたちに地元のヒーローのことを知ってもらいたいと、そのネットワークを駆使して、平成26年に『戦国またのぞき～丹後偉人ブック vol.1～』（写真添付）を発売。御多分に洩れず、宮津市も年々人口が減り、ピーク時の36000人から今では半分に。一刻も早く「オンリーワン」のまちづくりをしないと、このまちは無くなると危機感を持ち、天橋立をもっと活かすためにも、このまちの良さをわかりやすく、世界中の人に発信したいという。もう一つ、細川忠興公が、戦国時代が終わると見るや、いち早く鉄砲鍛冶の技術を装飾用の刀の鍔（つば）を生産する体制に切り替え、新たな産業を興したように、地元の商売も地域内の消費でとどまるのではなく外貨を稼げる創意工夫を自分たちのような若い事業者がどんどん行なっていかなければと、熱く語っていたことが印象的でした。また、「ブラタモリ」よろしく、まち歩きを企画することも多いのだとか。是非とも、忠興公ゆかりの「ブラミヤヅ」を期待したいものです！

\*「まちの人間国宝さん」認定No.3若林正博さんからの推薦を受けて取材させていただきました。

（松尾 清嗣）





認定日：2018.05.25 認定者：松尾

「オフィス・コン・ジュント 代表」

児嶋 きよみ 氏



## 「多文化共生の第一人者」

### ■紹介記事

私は、まずもって、Office Com Junto( オフィス・コン・ジュント )という素敵な団体名に惹かれました。

Com Junto はポルトガル語で、英語の with together( ~と共に )という意味らしい。

この団体の代表が児嶋さん。何となく同じにおいがするなぁと個人的に感じていました。

その主な活動は「グローバルセッション(GS)」と「ひまわり教室」。

1999年亀岡市国際センター(現・市交流会館)での英会話講座の一環で行われたGSを途中から引き継ぎ、この5月でナント309回目を数えます。毎月、国内外の、120人の会員に案内を送り、

ゲストスピーカーと参加者は、原則共通言語である英語でテーマに沿ってディスカッション。

GSは、参加者の“自主的な”対話を促すために、「当てない」「黙っていてもOK」「どこから入ってもいい」というのがルール。今ではゲストスピーカーの自国の紹介の場から、居場所や友達づくりの場にもなっている

ようです。また、GSの運営を通して実感した、日本に住む多様な人々との共生の大切さから、亀岡市内で外国にルーツをもつ子どもと保護者の学習支援をする「ひまわり教室」を2014年から開始。

例えば、母親が外国人で日本語を話せても読み書きができない場合が多く、子どもが学校からプリントをもらってきても理解できず、そのようなことが度重なることで彼らが地域で生きにくくなっている現実に一石を投じる取組みです。このことに共感を得たボランティアの指導者が今では25人。

毎月3回の教室では、基本マンツーマンで対応し、その回ごとに、指導者から提出されたレポートを共有するための編集作業も児嶋さんの大切な仕事。

定期的に小学校や中学校の校長会にも顔を出し理解を求め続けているという。

その成果の一つとして、学校のプリントに「ふりがな」をつける学校が増えてきたらしい。

まだまだ課題は多く本来は学校の問題と、言いつつも出来ることを軽やかにやってのける姿勢に感動を覚えます。

彼女の口癖である、「頑張らない」「やりたいことしかやらない」から、続けられるのでしょう。

彼女は、福井県丹生郡織田町の生まれ、織田信長ゆかりの地らしい。

亀岡に住んで44年になるそうですが、明智光秀ゆかりのまちに居を構えているのも何とも奇妙な縁。

何はともあれ、彼女の「まめさ」は半端ではなく、今後もその活躍ぶりに目が離せそうにありません。

(松尾 清嗣)





認定日：2018.08.15 認定者：松尾

「保津川寄席プロデューサー」

富田 勤 氏



「アマチュア落語50年！」

■紹介記事

奇数月の第3土曜日に定期開催される、「保津川寄席」というこだわりの素人寄席が亀岡にあります。その仕掛け人が富田さん。彼は2010年5月にそれまで経営に携わっていた会社をきっぱりと辞め、私の主宰する「かめおかまの元気づくりプロジェクト」の参謀役として力を貸してくれることに。市民のふれあいや、パフォーマンスの場として、その年の11月に立ち上げて以来、来年（2019年）1月には第50回の節目を迎えます。一貫して「玄人はだし」のレベルの高さを追求し、その結果、毎回多くのファンが詰めかけてくださっています。

素人寄席でも木戸銭をもらっている以上は、その金額の倍以上の「品質」を担保しないと常連さんにはなってもらえない、が彼の持論。

お陰様で、今では市の内外から「出前落語」のオファーも後を絶たない。

今回彼を認定した理由は、保津川寄席の地位を確固たるものに育て上げた手腕もさることながら、50年間落語を続けていることです。中学3年生の時に落語研究会に入り当時顧問だったプロの噺家、桂米之助師に稽古をつけてもらったというから、筋金入り。

母校の大学の「落研」OBによる、東北支援のチャリティー落語会を開催したり、

京都の障害者施設でも落語を教えたりと、地域活動にも余念がない。そんな彼も以前より65歳で「引退」を宣言。「体力の限界」らしい（笑）。

来年1月の保津川寄席をもって高座から降りるとのこと。なんとも寂しい限りではありますが、第50回記念公演は、ガレリアかめおかの響ホールで盛大にやりたいと思っております。

長い間お疲れ様でした。本当にありがとうございました。

感謝、感謝です。また、どこかで、ゆっくりと一献！



（松尾 清嗣）

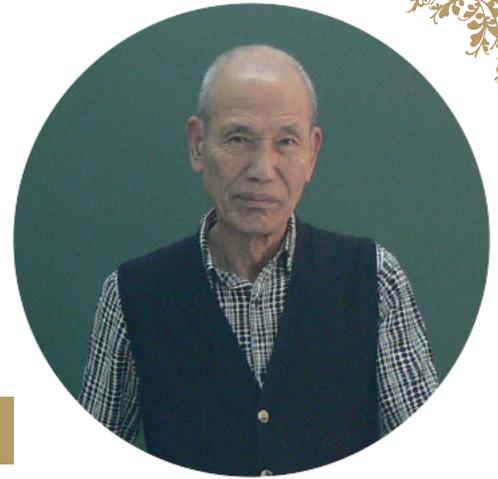




認定日：2019.02.17 認定者：松尾

「AI 囲碁キッズクラブ」

# 俣野 喜三 氏



「市民の半分が囲碁をやってほしい、が夢」

## ■紹介記事

今回、認定No.5の西脇安信さんから、囲碁歴53年の俣野喜三さんを紹介いただきました。

俣野さんは、高校を卒業後、亀岡市役所固定資産税担当の臨時職員として亀岡じゅうを回ったという。

その時の上司から「若いうちから趣味は持ったほうがよい。歳をとってからでもできる、囲碁をやったらどうだ」と勧められたのが、囲碁との出会い。もともと勝負ごとが大好きだったこともあり、

また、近所に準プロの棋士も住んでいたため、即、始めたとのこと。

新聞の囲碁記事を切り抜き、独学で戦法を研究し、市内の囲碁クラブに属し対戦を楽しんでいたが、腕が上がるにつれて、市内の小中学校に指導にもまわり、10年ほど前から亀岡市出身のプロ棋士、井上綾子さん主宰の「AI 囲碁キッズクラブ」で活躍中。

彼に囲碁の魅力について尋ねると、「知らない人とも打てる。打った後は友だちになれる」と即答。

おかげで、友だちには不自由しないとか（笑）。

セカンドライフを自分らしく有意義に過ごされている、とまづもって感心させられました。

これからの夢を訊くと、亀岡市民の半分が囲碁をやってほしい、

そのためにも子どもたちに指導を続けたいという。囲碁をやれば、おとなも子どもも「考える力」が身につく。

何よりの“勉強”だと、インタビューしながら思った次第。

なるほど。戦国時代、あの信長も秀吉や家康と囲碁をやっていたとか。

光秀さんはその仲間に入っていたのかな（笑）。



（松尾 清嗣）





認定日：2019.10.10 認定者：松尾

「弦楽ふるさとの会」代表

小谷 昌代 氏



## 「四ノ宮琵琶の“ひろめびと”」

### ■紹介記事

小谷さんの、四ノ宮愛、琵琶愛はとにかく凄い！

私が彼女と知り合ったのは、数年前の、同志社大学大学院の公開講座。

琵琶をこよなく愛する、不思議な人だなあ～、が第一印象。その後「地域を盛り上げる」テーマで意気投合し、同じチームで熱く語り合いました。休みの日には、四ノ宮のまち歩きも体験させていただき「地元愛」の強い人だなあと、あらためて感動した次第です。

そもそも、「四ノ宮琵琶“ひろめびと”」としての活動のきっかけは、今から十数年前に遡ります。

昔の山科の記憶を写真で残そう、まちの歴史を学び、これからのまちづくりをみんなで考えようという、山科区役所の取組みに応募したのが始まり。

公募で集まった区民の皆さんと京都橘大学の学生さん、区役所と一緒に写真集『モノクローム ヤマシナ～未来へつなぐ山科の記憶』を発行、その活動が「やましなを語りつぐ会」発足につながり、地元の方から色々な話を聞くなかで人康（さねやす）親王や琵琶のことを知り、「弦楽ふるさとの会」を設立。

その後、ひよんなご縁から四宮大明神の祠を修復したり、琵琶をもっと身近な楽器として広めたいとの思いから、四ノ宮琵琶サークル「音霊杓子（おたまじゃくし）」も立ち上げることに。

また、琵琶に興味を持っていただく方のすそ野を広げる活動の一環として、高価な琵琶を手軽な価格で提供できるよう機械加工に協力してくれる、亀岡の木工所や組み立ててくれる京都の指物職人やギター職人を探し出し交渉の結果、4万4440円（税別価格）での琵琶販売を実現するなど、今もって大活躍中！

さて、次の一手は何？とたずねると、「ゴール近し！」と即答。

声明（しょうみょう＝仏典に節をつけた仏教音楽のひとつ）を本格的に習いその節で和歌を唄い始めたとのこと。「伝統芸能故に自分の技量の底上げをしていきたい、そのためにも楽しんでいきます」と締めくくられたのが、いかにも小谷さんらしくとても印象的でした。

（松尾 清嗣）





認定日：2020.08.29 認定者：松尾

「福知山観光ガイドの会」副会長  
芦田 八郎 氏



「光秀公や福知山愛、半端ない！」

■紹介記事

私が初めて芦田さんにお会いしたのは、2019年7月18日。明智光秀公が念願の、大河ドラマの主人公に決まり、福知山観光ガイドの会の皆さんが丹波亀山城跡（亀岡市）を見学に来られた時でした。その時は名刺交換し一言二言ことばを交わした程度でしたが、何となくその笑顔とお人柄が気になっていました。それから一年。思い切って連絡を取ってみたところ、快くインタビューに応じてくださり、市内のガイドもしていただきました。

思った通りの、熱い人（笑）！光秀公や福知山郷土愛は半端ないです！

そもそも歴史や地元の事に興味をもったのは、高校の時の歴史の先生の話が面白かったから。大手商社に営業職として就職するも、サラリーマン生活のうち、ナント23年間も単身赴任生活。余暇を利用して、その各地を積極的に巡ったという。

また、芦田家のルーツは、地元の福知山市六人部にあった打越城主、大槻阿多之助の末裔であることは子供の時から耳にしていたとのことで、光秀を苦しめた「丹波の赤鬼」黒井城主、荻野直正と同じ一族だったことがわかり、俄然「光秀が築いた城下町、福知山」を深掘りしようと、丹波福知山明智光秀公研究会や福知山史談会に入会。さらに、福知山観光ガイドの会にも参加し、調べたことを自分のことばで伝えるガイドを心掛けているとのこと。

当ガイドの会もご多分に漏れず高齢化が進み、会の存続発展を目指して副会長として色々なチャレンジをされている最中のようなのです。

インタビューの最後に、定番の「本能寺の変」の動機を尋ねました。

明快な答えが！それは、私が企んでいる、ある方との対談イベントで、披露してもらおうこととしましょう！

（松尾 清嗣）





認定日：2021.01.30 認定者：松尾

「南丹市歴史探勝会」会長

# 小島 寛 氏

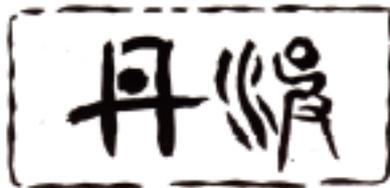


## 「あの小島永明の後裔、光秀を語る！」

### ■紹介記事

小島寛さんは、退職後地元に戻られ自然豊かな丹波園部の地に抱かれ、有機農業でお米作りのかたわら、その地に伝わる歴史と文化の探究に勤しんでおられます。多くの方がそうですが、自分の先祖のルーツに関心を持つことが歴史の興味につながります。その意味で戦国時代、明智光秀公の丹波平定に与した小島永明の後裔であり、地域に残る史跡や伝説、古文書を研究されるに相応しい見識をお持ちの方で、南丹市歴史探勝会会長としてご活躍中です。私は、明智光秀公ゆかりの地、福知山とのご縁で、この度小島寛さんとお付き合いさせていただくことができました。今後、郷土歴史家として益々のご発展ご活躍で、さらに交流が広がり深まることを期待いたします。

福知山観光ガイドの会 副会長  
 丹波福知山明智光秀公研究会 事務局員  
 芦田八郎



TANBA

第22号

*特選 探勝先陣 #2*		
探勝ノート	上野 道二 探勝先陣の行状記(冒険と先陣)	1
探勝ノート	田 友三郎 本陣守り地について	21
探勝ノート	小島 寛 明智光秀公の丹波平定について	27
探勝ノート	吉田 英光 丹波平定と福知山について	47
探勝ノート	林 昭 彦 丹波平定と福知山について	59
*一編後継*		
コト 山 田 隆 丹波平定と福知山について	66	
探勝ノート	中川 英光 丹波平定について	68
探勝ノート	辻 正一 丹波平定と福知山について	76
史料編	浅井 清久 丹波平定と福知山について	95

2020年(令和2年)

丹波史談会





認定日：2021.08.01 認定者：松尾

「衣笠三省塾」塾主

長野 享司 氏



## 「心身両面の鍛錬指導を実践！」

### ■紹介

1953年（昭和28年）京都市北区生まれ。

1972年（昭和47年）衣笠三省塾に入塾。

衣笠三省塾で当時の京都市議員先生に

10年間論語、孟子、日本外史など漢籍を学ぶ。

1976年（昭和51年）大学卒業後、会社員生活を経て、

2005年（平成17年）衣笠三省塾を再興。

現在、衣笠三省塾の他に、亀岡梅岩こころ塾、心学修正舎会輔にて講師を務める。

### ■推薦文

松尾さんの心学修正舎のお仕事の外に 広く「生き生きした」社会の為の多彩な御活動に 敬意を表します。本当にご苦労様です。松尾さんの社会の一隅で 社会貢献されている人を 折々に 紹介されておられるのも素晴らしい視点だと思います。

是非我らの同志「長野享司」さんも 社会の一隅で 最澄伝教大師の「一燈照隅（万燈照国）」に志す人として取り上げて頂けたら幸いと 推薦申し上げる次第です。

長野さんは 江戸時代創業の老舗呉服店・千切屋を 50歳を期に会社務めを辞め、自らの 生きる目標を 利潤追求の生活視点から 世相の道德倫理観の低下を憂いて一念発起され、 道德倫理再生の為の社会貢献的活動に転身され、 学生時代から親しく学ばれた「孔孟の儒学」の知見を基に日本伝統精神の中核の一つである「漢籍・東洋古典」の塾・衣笠三省塾を 始められた方です。

又 一方では社会に役立つ人作りをモットーにする、四国に生まれた「宗道臣」の少林寺 拳法の修行にも親しまれ、特に広く児童から若い人の精神と身体鍛錬の場として「京都衣笠道院」も開かれ、小中学校にも出かけて青少年の健全な成長に寄与されています。

いわば心・精神と身体の両面の鍛錬指導に心掛けておられ、自らも「真に徳性の優れた指導者」の道を実践されているとも思います。

何卒宜しくお取り上げ頂きたくお願い申し上げます。

（元・心学修正舎理事、元・心学参前舎常務理事、元・石門心学会理事）後藤一成





認定日：2021.11.04 認定者：松尾

「チームオープン・セサミ代表」

中川 久徳 氏



「長岡京で一番忙しいボランティア」

【中川久徳さん推薦文】

私を知る限り、長岡京市で一番忙しい市民ボランティアです。ひきこもり支援のチームオープン・セサミ代表、チーム防災 OTOKUNI 代表、セカンドライフの会代表、防災士、ボーイスカウト長岡第 2 団リーダーなど、肩書きだけで 10 以上。アクティブシニアとして、お手本のような生活を送っている人です。チームオープン・セサミの「隊長」として、個性豊かなメンバーを束ねて動かしてください。これからもよろしくお願いいたします。（寺嶋智美）

献血とゴミ拾いの趣味をもつ中川リーダーを推薦いたします。

中川さんの驚くべきことそれはネガティブな言葉を聞いたことがありません。

ひきこもり支援でムーブメントを起こしたい！と代表になり、まちの年長の方に健康と笑顔をお届けする『京都でスクエアステップを広める会』の重鎮インストラクターとして、我が子ほどの年齢差がある医師や大学教授を陰から支えてる姿には憧れを抱いています。

私は中川リーダーとご縁をいただき一緒に活動をすることに誇りを持っています。ひさだゆみ（久田由美）

私が中川さんと出会ったのは、同志社大学大学院・新川先生の公開講座。2015 年の春学期と記憶しています。

私はこの講座から、結果としてセカンドライフの“醍醐味”のようなものを学んだ気がします。

おそらく中川さんもそのような気持ちを持ち、いまだに「同志」としてお付き合いいただいていると、勝手に思っています。

この公開講座で生まれた 70's Project のメイン事業の一つである「まちの人間国宝さん探しプロジェクト」も今年度で一区切り。最後に、もっともそれに相応しい人物として、自信をもって推薦したいと思います。

（松尾清嗣）





認定日：2021.11.17 認定者：松尾

「京都わかくさねっと 事務局長」

北川 美里 氏



「少女のこことになれば、いつ寝てるの？」

【北川美里さん推薦文】

「京都わかくさねっと」事務局長の北川美里さんをご紹介します。

「京都わかくさねっと」とは、学校や家庭で生きづらさを抱える少女たちに居場所、安心を与え支援する一般社団法人の活動です。その事務局長が、北川美里さん。とにかくエネルギッシュな方です。

少女のこことになれば、「いつ寝てるの?」「家庭の主婦やってんの?」と思うぐらい打ち込む。

こんな方やから、少女からの信頼も厚く、北川さんに相談したら一緒に考え何とか解決する糸口を見つけてもらえると、少女の口から少女の友達へと繋がり、北川さんを慕ってくる少女たちも数多くいます。

「NO」と言えない方だから、色んな難題を引き受け、「大丈夫かな?」と思うこともあるが、いつの間にか解決をされている。なんと、不思議な力の持ち主である。

というのも、あらゆる分野の方との繋がり（ネットワーク）をもっていられる方に間違いはない。

お酒大好き、少々主婦としては不安を抱くが、息子さんが学校で尊敬する人と聞かれた時、

「お母さん」と言われたとか。お聞きした時、その理由は「自分のしたいことを自由に伸び伸びとやっている」だったそうです。うなづけますね（笑）。

（亀岡地区更生保護女性会前会長 常田直子）

私が北川さんと出会ったのは、同志社大学大学院・新川先生の公開講座。

2018年度のプレゼンでタッグを組んで、孤独な中高年男性をターゲットにした「けんこうキャバクラ」事業を、真面目に提案したことを鮮烈に覚えています。是非とも、アフターコロナ時代に実現したいものです（笑）。

（松尾清嗣）





認定日：2022.03.05 認定者：松尾

「同志社大学名誉教授」

新川 達郎 氏



「長年の“名物講座”に、感謝！」

【新川達郎さん推薦文】

新川先生、突然の失礼をお許してください。

2022年3月5日第13回まちの人間国宝さんトークイベントにおいて、コメントを頂戴し、イベントに花を添えていただき誠にありがとうございました。

長年のご指導に対し感謝の気持ちをこのタイミングで！と、以前より企んでおりましたところ、本当に実現できたことを心より喜んでおります。

さて、私は「ある事」をキッカケに、2010年1月をもって、勝手に「定年退職」し、市民活動団体「かめおかまちの元気づくりプロジェクト」を立ち上げました。“我流”ながら、10年以上粛々と続けられていることを不思議な心持ちでおります。

また、2015年には亀岡市役所の職員から、先生の協働演習を紹介されたものの、恐る恐る参加したことを昨日のことに覚えています。良い仲間に恵まれその魅力にハマっていく自分がありました（笑）。以来、先生のお人柄に惹かれ6年間も通い続け、事業展開の組立て方や実践のノウハウを学びました。我流で始めた市民活動ですが、先生のご指導の下、なんとなく「背骨」のようなものが出来たように勝手に思っています。この演習で生まれた、私にとって二つ目のユニット「70's Project」も最低10年！を目標に頑張っていきたいと思いますので、今後ともご指導のほどよろしくお願いたします。

（松尾清嗣）

